



「つどう、つながる、つなげる、つくりだす」
豊島区生涯学習センター機能の実現に向けての
意見書



2016年12月26日

第五期豊島区生涯学習推進協議会

目次

1. これまでの流れ	1
2. 現状と課題	2
(1) 求められる多様なコンテンツ	2
(2) 心のバリアフリー化の必要性	2
(3) ネットワーク形成のためのプラットフォームの欠如	2
(4) 生涯学習情報の散乱や連携不足	2
(5) つなげる人材の不足	2
(6) 学び続けたい、学んだ成果を発信したい区民への受け皿不足	3
3. 生涯学習センター機能を実現するための方向性	4
(1) 「つどう」プラットフォームの整備	5
(2) 「つながる」ワンストップサービスの実現	6
(3) 「つなげる」人材育成プログラムの構築	7
(4) 「つくりだす」区民ネットワーク組織の育成	8
4. センター機能窓口の整備	9
(1) センター事務局機能	9
(2) 区民ネットワーク組織の拠点	9
5. 各委員からの意見	11
6. おわりに	17

1. これまでの流れ

生涯学習センターを設置することは、豊島区の生涯学習を推進する上で重要な役割を果たす施設として、第一次生涯学習推進計画が策定された平成3年から期待されてきました。平成7年には、豊島区社会教育委員会議から「生涯学習センターに期待するもの」として設置の実現に向けての具体的な提言が建議され、平成13年には、第二次生涯学習推進計画の策定に向け、「これからの豊島区の生涯学習の推進について」の答申が行なわれています。

豊島区の生涯学習をとりまく大きな動きとして、平成17年度に文化行政の一元化がなされ、教育委員会に設置されていた生涯学習部門が区長部局へ移管となり、文化行政のエンジン役としての生涯学習推進が求められています。あわせて平成18年度策定の「豊島区基本計画」には、平成22年度に生涯学習センターを旧大明小学校に設置すると明文化されました。

これを受け平成19年度には、豊島区社会教育委員会議を改組した第一期豊島区生涯学習推進協議会が「豊島区生涯学習センター設置に関する意見書」を区長に提出し、「つどう・つながる・つなげる・つくりだす」をキーワードとし、それらを具体化する5つの機能「①学習の場の「深化」・拡充機能、②コーディネート・相談機能、③人材育成・活用機能、④情報提供・発信機能、⑤区の全体施策との調整機能」について提言されました。

平成22年度には、「豊島区生涯学習推進計画」（平成22年度～32年度）が策定され、重点施策として生涯学習センターの整備をあげ、平成24年度にみらい館大明に生涯学習センターを設置し、その運営はみらい館大明を運営するNPO法人いけぶくろ大明のこれまでの取組みを継承し、区と協働で行なう仕組みを構築するとしています。

平成23年度から、生涯学習センターのモデル事業として「若者支援事業」をNPO法人いけぶくろ大明との協働事業で開始しました。平成25年度に、第四期豊島区生涯学習推進協議会が「つどう・つながる・つなげる・つくりだす生涯学習センターを目指して～生涯学習の推進に向けて～」をまとめ、5つの機能ごとに、現状と課題、方向性について示しています。

平成27年度より第五期生涯学習推進協議会が発足し、ソフト面での生涯学習センターの実現のため、この意見書をまとめるに至っております。

2. 現状と課題

(1) 求められる多様なコンテンツ

社会の成熟化に伴い個人の価値観やライフスタイルが多様化する中で、求められる学習ニーズについても幅広く、すべてのニーズに応えられていません。

さらに、学びの場があることが住み続けたいという動機の大きな一因となっているという調査結果も出ています。ここに住み続けたいという気持ちを持つ方が増えることが持続可能性都市として発展させていくには必要であり、それには多様なコンテンツとしての「学習機会」を担保することが重要です。

(2) 心のバリアフリー化の必要性

「女性にやさしいまちづくり」を実現するためにも、一人ひとりが自分らしく生きていけるような環境をつくることが不可欠です。施設の改築となると、すぐには実現が難しいこともあります。まずは心のバリアを取り払っていくために、学びあう機会を設けることが必要です。互いの違いを認め合い、マイノリティの方も暮らしやすいまちを学びでつくっていくことが求められます。

(3) ネットワーク形成のためのプラットフォームの欠如

地域を豊かにするための行政、地域住民、生涯学習団体、NPOなどがゆるやかにネットワークを組めるプラットフォーム※₁の仕組みがなく、それぞれがばらばらに活動を行なっているため、有機的に作用していません。ゆるやかな知縁・地縁をつなぎ、必要に応じて活用できる「土台」をつくることが急務となっています。

(4) 生涯学習情報の散乱や連携不足

区として、様々な課が生涯学習関連事業に取り組み、区民に対して学習サービスを提供していますが、実施している課同士で横の連携がうまく図れておらず、情報が共有化できていません。そのため、区民にとってどの窓口に相談すればいいのかわからず、本当に欲しい情報が手に入りにくい状況となっています。

(5) つなげる人材の不足

区内には、地域文化創造館、区民ひろば、子ども家庭支援センター、みらい

館大明など、学習活動を展開できる様々な場があります。そこには、実施される多様な講座で学ぶ人や、自分たちで豊かな学習活動を行なっている団体が数多くあります。しかし、学ぶ人たちや学習団体をネットワーク化する働きかけをする人材が不足しています。人々の横のつながりを豊かにすることで、学びが広がり、深まることが期待されます。

(6) 学び続けたい、学んだ成果を発信したい区民への受け皿不足

としまコミュニティ大学事業や地域文化創造館での区民教室事業をはじめ、様々な場で行われている講座によって、学びのきっかけをつかみ、学び続けたい、学んだ成果をどこかで発信したいと考える方も増えてきています。しかし、自主サークル活動の場が限られていたり、学びを深めるために講演会を企画したり、学んだ成果を気軽に発表したりできる場が限られ、敷居が高いという現状が否めません。

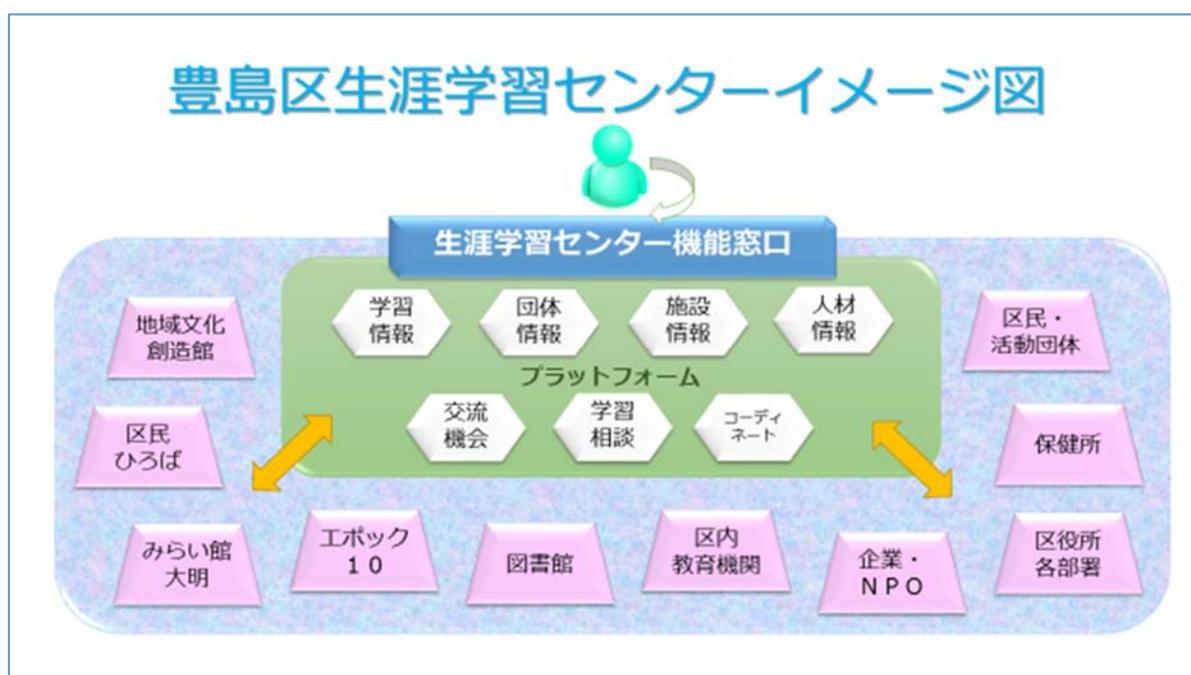
※1 プラットフォーム：ここでは、人や情報が集まり、ゆるやかなネットワークを組むための場所・基盤をさします。

3. 生涯学習センター機能を実現するための方向性

豊島区生涯学習推進計画の基本理念である「つどう・つながる・つなげる・つくりだす」を実現するため、(1)プラットフォームの整備、(2)ワンストップサービス※2の実現、(3)人材育成プログラムの構築、(4)区民ネットワーク組織の育成といった4つの方向性が求められます。

4つの方向性は、ひと、まち、文化の多様性に根ざした学習活動を活性化させ、区民自らの力で新たな価値を創造する力を育むものです。豊島区が目指す「国際アートカルチャー都市」の実現に生涯学習の側面から寄与するものと言えます。

下の図は、生涯学習センターのイメージ図です。学びたいと思った方が、生涯学習センター機能窓口を訪問した時に、たらいまわしになることなく、必要な学習情報や学習相談ができるような情報基盤を整えます。また、図にあるような生涯学習に関連する施設同士が、区民にとって有用な情報やノウハウを共有できるような緩やかなつながりを構築することが期待されます。



※2 ワンストップサービス：ここでは、その場に行けば、区民が欲しい学習情報が入手できたり、学習相談に応じられたりするように、学習に関するサービスをひとつの場所で集約して提供することです。

(1) 「つどう」プラットフォームの整備 - 交流と学習を促進する居場所づくり -

1) 「居場所」の整備

最寄りの生涯学習施設のロビー等のフリースペースを活用して、区民が気軽に集える「居場所」を整備する必要があります。整備する居場所には以下の設備・機能が求められます。

- ① 交流と学習を促進する空間
- ② 生涯学習情報の提供（情報掲示板や端末・ネット会議システム）
- ③ 生涯学習相談窓口及び相談員の配置
- ④ 上記機能を基盤とした他施設との相互交流システムの構築

こうした「居場所」の提供・活用を通じて、心のバリアフリー化を実現するとともに、マイノリティの社会参加を促進していくことが望まれます。

2) 多様な主体が「交流・学習」できる機会の提供

区民学習活動団体の交流と学習を支援していくため、毎年1回「学習ネットワーク交流会」を開催し、学習活動団体や施設間の情報共有、提供、学んだ成果を深める機会を設けることが必要です。そのため区ならではの多様なテーマを設定し、区民、学習活動団体、教育・研究機関、事業者、行政等が集い、協働して学習できるような講座やワークショップ等を定期的で開催していくことが求められます。

3) プラットフォームを運営する組織体制の整備

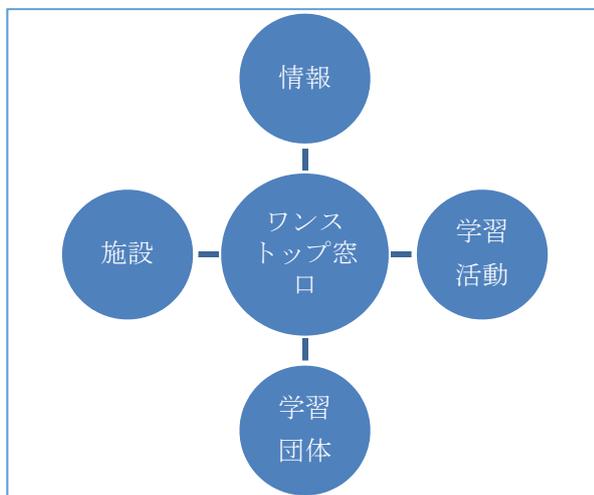
「居場所」と「交流・学習」を運営・企画していくためには、それを支える安定的・持続的な組織体制の整備が不可欠です。

行政だけでなく既存の区民学習活動団体が参画するネットワーク型の組織体制の構築が求められます。そのための支援体制を整える必要があります。



(2)「つながる」ワンストップサービスの実現 - 学習情報の収集・発信・相互連携 -

区民の多様な学習要求に応え、まちづくりにつながる学びを促進していくためには、ワンストップサービスの実現が急務です。区内の多様な生涯学習活動情報を収集するとともに、活動・団体・施設間のネットワーク化を図りながら、区民に対する情報提供と相談・助言機能を充実させていくことが必要です。また行政内部及び区民団体間の連携体制を強化していくことが必要です。以下の取組みが求められます。



1) 生涯学習情報の収集と発信・アーカイブ整備

ウェブシステムを再構築し、趣味・教養的なものから社会的活動にかかわるものまで、全ての生涯学習情報を網羅的・横断的に収集し、発信・広報することが必要です。こうした情報へのアクセスを容易にするため各施設に区民が利用できるインターネット利用環境の整備が求められます。

また、生涯学習成果の蓄積を図るため、学習成果に関する情報を収集して、ウェブサイト上にアーカイブを設置・公開することを通して、区民の学習文化の継承を支援する必要があります。さらに、一つの情報を検索すると関連する情報も合わせて表示されるような「ひもづけ機能」の充実により、学習のひろがりを持たせます。

パソコン操作が苦手な区民も情報から阻害されないように、ウェブシステムはデザイン・操作性ともにわかりやすいものとする必要があります。また、ウェブシステムへアクセスするきっかけとなる効果的で集約的な紙の情報媒体の発行も求められます。

2) 相談・助言機能の強化と学習コーディネート

学びたい区民が求めている学習機会や施設に容易にアクセスできるように、各生涯学習施設において、相談・助言及び学習コーディネート機能を強化する必要があります。

ウェブサイトやウェブ会議を整備し活用することで、施設間のネットワークを強化し、区民の多様な学習要求に応じていくことが求められます。

3) 行政内の情報集約と連携体制及び区民学習活動団体との連携構築

情報を効果的に収集し、活用していくためには、行政内部の情報集約体制や連携体制の構築はもちろん、区民学習活動団体との連携構築が必要です。連携・協働を実現するための場や機会を充実させていくことが求められます。

(3) 「つなげる」人材育成プログラムの構築

1) 「国際アートカルチャー都市」の基盤となる地域に根差した学習文化の支援

伝統的な文化から先端的な文化まで、衣食住に関わる生活文化からハードな都市づくりまでをも含み、アートの持つ想像力・創造力で、まちづくりを展開していくことが「国際アートカルチャー都市」の実現につながります。カルチャーという言葉の語源は、「たがやす」にあり、人をたがやし、まちをたがやして、その時の鍬となるのが文化であり、まさに生涯学習の営みなのです。

新しい文化だけではなく、区民の方がこれまで取り組まれてきた地域に根差した多様な生涯学習活動を引き続き支援していくことは大前提となります。

2) 新たな区民人材の育成

「国際アートカルチャー都市」を支えるためには、既存の区民学習活動を基盤としながら、各学習活動団体間のネットワーク化を図り、団体の潜在能力を引き出し、その力をまちづくりに波及展開させることが求められます。また行政－区民間の連携・協働がより一層必要とされます。

このため、地域の学習文化に根差して、地域外にも目を向けながら、区民－区民、区民－行政を「つなげる」コーディネート能力もった人材が必要であり、そのための育成プログラムを構築し実施していくことが求められます。プログラムの構築と運営に当たっては、行政が場と機会を提供し、区内の産官学民の叡智を結集し、区民と行政が一体となって取組める体制をつくっていくことが必要です。

3) 学習したことを発信・深化するための仕組みづくり

区民の学習成果を発信し深化していくこと、そして成果を活用してまちづくり等に生かしていくことが、「国際アートカルチャー都市」を輝かせることにつながります。

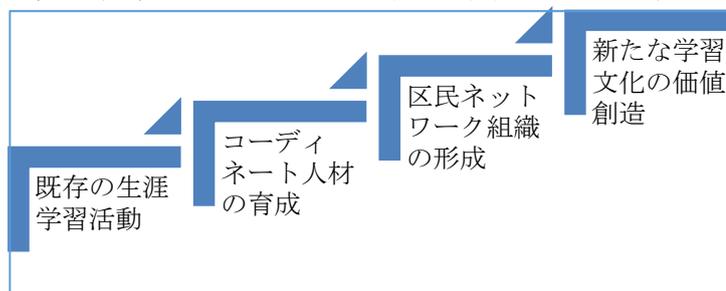
(4)「つくりだす」区民ネットワーク組織の育成

人材育成とともに、学習活動とその成果を還元して価値をつくりだす場や機会を調整し、区民目線の企画・提言を行うことができる「区民ネットワーク組織」の育成が急務です。

区民ネットワーク組織は、区民を様々な学習活動にいざなうコーディネーターの役割を担うとともに、学習を活性化して新たな価値を創り出す役割

を果たします。また区民の学習活動の最新の状況やニーズを把握し、分析・研究して、行政と協働しながら効果的な方策を提案する政策提言機能を持つことが期待されます。

「国際アートカルチャー都市」の主役である区民自身が学習活動を通じて新たな価値をつくりだしていくために、人と組織のネットワークの育成・整備が求められています。



4. センター機能窓口の整備

(1) センター事務局機能

4つの方向性を実現させるためには、安定的・持続的な事務局機能を整備することが不可欠です。地域住民を中心とした NPO 法人による運営が成功している生涯学習施設「みらい館大明」にセンター事務局を開設することで、生涯学習の推進や官民協働体制の構築における相乗効果が期待できます。

1) ワンストップ窓口の総合調整・情報集約拠点

各生涯学習施設情報結節点としての総合窓口総括機能を目指します。

2) 事務局機能

各種生涯学習事業の企画・立案・運営、行政情報・区民学習情報等の分析・整理・発信、区民活動団体との連携・協働のための業務を持つための人員の配置が求められます。

(2) 区民ネットワーク組織の拠点

センターには、事務窓口と一体となって、行政－区民学習活動の連携・協働を促進して区民学習活動をコーディネートする区民ネットワーク組織の拠点機能を設けることが必要です。区民ネットワーク拠点として以下の機能が求められます。

1) 区民人材育成講座の企画・立案・運営

行政、生涯学習団体、教育・研究機関等と連携しながらコーディネーター人材育成のためのプログラムの企画・立案・運営の事務局を担います。

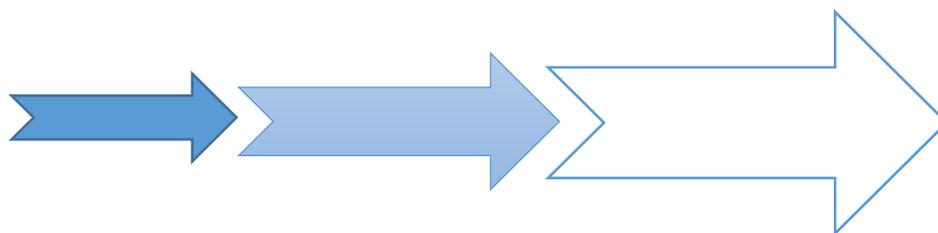
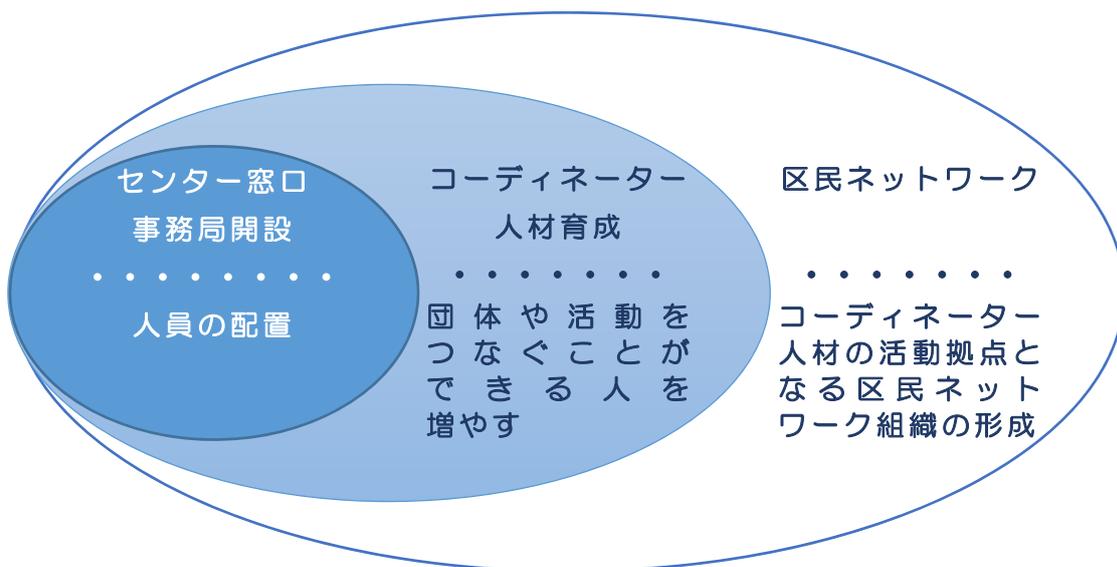
2) ネットワーク・コーディネート拠点

施設や活動間のネットワークを促進し、各種団体間の活動の連携・協働を活性化させるコーディネート拠点としての機能を持ちます。

3) 調査・研究と、政策提言機能

行政、生涯学習団体、教育・研究機関等と連携・協働しながら区民目線で生涯学習活動の調査研究に取り組むとともに、その成果を政策提言につなげていく機能を持ちます。

以上の機能を育成・構築していくため、初動段階においてはセンター窓口が中心となって区内の産官学民と協働しながら、段階的に、区民の人材育成と組織化を測り、物心両面で、ネットワークの組織と機能を充実・発展させていく必要があります。



5. 各委員からの意見

「生涯スポーツ実現に寄与する生涯学習センターに」

佐藤裕美（豊島区スポーツ推進委員）

＜生涯スポーツ＞という言葉がある。生涯スポーツとは、その生涯を通じて、健康の保持・増進やレクリエーションを目的に「だれもが、いつでも、どこでも気軽に参加できる」スポーツのことである。豊島区民にとっての＜生涯スポーツ＞実現のため、生涯学習センターに期待される役割は大きいと考える。

具体的には、各競技・種目の協会・連盟、体育関連施設、体育協会、レクリエーション協会、地域スポーツクラブ、スポーツ推進委員協議会等といったスポーツ関連諸団体が生涯学習センターと繋がることで、分散している各団体の情報が集約され、見やすく整理されること。それによって、スポーツ関係者だけでなく「健康のために何かスポーツをしてみたい」と考える区民が気軽にその情報にアクセスできること。センターを通じて各団体が繋がりを深め情報交換を密にし、競技単体での活動が活発になるだけでなく区民へのスポーツの機会を広めるための団体横断的な活動が盛り上がること。体育関連施設においては、各チーム・団体にとってさらに利用し易くなることはもちろん、生涯学習施設としての位置づけを強くし、日ごろスポーツから縁通り区民にも身近な施設となること。

実現に向けてはもちろん、関係各団体間での十分な話し合いが必要となる。また、インターネットの利用方法や、実際の各施設とセンター（窓口）のそれぞれのあり方などについても十分な検討が必要であろう。

豊島区における生涯学習センターには、区民にとっての＜生涯スポーツ＞を実現する機能を果たしてほしいと願う。

「『つどう』生涯学習センターを目指して」

長谷川正子（コミュニティ大学マナビト生）

生涯学習基本意念にうたわれている「集う」、「誰でもが、いつでも学べる」に関し、それ以前に、「そこに自分の居場所がある」ということが重要ではないか、と感じている。

板橋区を訪問した時、フロアーに数々用意された机を囲み、談笑している色々な年齢層のグループを目にした。また、練馬区では、図書館が併設され、ロビーや前庭に、やはり、自由に集えるスペースがあったのを見ている。豊島区のみらい館大明のブックカフェにもホックリできるスペースがあったが、入

口からその場所までの距離や、入口近くにあった休憩室の解放感にちょっと躊躇がありそうに感じた。

自発的に集い、地域の中で、貴方も、この人も…と仲間の存在に気付かせ、つなげていけるコーディネーターがいて、学習・学びの情報がそこで得られる仕組みってステキだと思う。乳幼児と親・小学生から高齢者まで、特に、ドットと増える豊富なキャリアを持つ団塊の世代の集まりから生まれるであろう、生涯学習を欲する人々の支援やチャンスの実現に寄与できる指導者がいて、そこで育成される「仲間づくりの人材」が次の「集う」に力を発揮できれば、と思う。

「学びをつなぐコーディネーターの重要性」

濱地眞実子(特定非営利活動法人ひろばさくら)

日頃より、みらい館大明の事業パンフレットを拝見し、守備範囲・対象の広さ、内容の豊富さ、視点の多様性に魅力を感じています。ハード面では多少の不備は否めないものの、そのみらい館大明を豊島区の生涯センターの拠点とするという案はなかなか良いことだと思いました。

拠点を既成施設にするのであれば、ソフト面の充実を図って欲しいと思います。例えば、文化創造館を圏域とし、各区民ひろばと連携し、生涯学習指導員を圏域毎に配置し生涯学習機能をアップするなどの取り組みをしていただきたいです。

現在、区民ひろばは誰でも自由に利用出来るという点で地域住民に開かれた最後の施設となり、様々な役割を担っています。生涯学習活動もそれら役割の一つとなっています。生涯学習センターと文化創造館と区民ひろば事業をコーディネートする、そんなコーディネーターの存在を切望します。ネットワーク機能を整備し、活用する媒介者の設置を是非お願いします。

「学び続けるためのより良い環境を」

保木井 繁(公益財団法人としまみらい文化財団地域コミュニティ創造課長)

生涯学習では、学習者一人ひとりが意欲をもって学び続けることがとても大切であると考えます。そのためには、学びを選択するための様々な「情報の提供」、学び続けるための「環境の整備」、「学びの成果を還元」する機会や場の保証など、課題は山積しています。

豊島区では日々、様々な施設で多様なジャンルの区民向けの講座が開催されています。しかし、それらの情報が区民に幅広く提供されているとは言えない状況です。ネットやペーパーを使った総合的な情報提供のネットワーク作りが必要であると考えます。

また、学びの情報を得て学習を始めても、エレベーターがないために継続できない等、環境が学習継続の高いハードルになっている現状があります。区民が学び続けることのできる環境の整備も重要です。

そして、学んだ成果を還元するための機会や場の設定も大切です。学んだ知識や技術を周りに伝えたり、地域のために役立てたりする機会を構築していくことも欠かせません。

豊島区民が生涯にわたって学び続け、豊かな生活を送ることができるようにするために、ハード面、ソフト面でのよりよい改善ができればと考えます。

「行政と区民がともにつくりあう生涯学習推進を」

石崎 眞司（公募委員）

行政が行なう生涯学習推進とは、人が学びたいと欲する意欲を後押しすることである。究極は幸せづくりである。そのためには、学びを求める人の「学びセーフティネット」として公明・公正・機会均等であることが不可欠となる。幼児から老人まで、障害者から健常者まで、内容的には基礎的なものから実用的・専門的なものまでを対象に考えてみる必要がある。だが、緊急性などの状況によって全てを網羅することは不可能だから優先順位を考慮することとなる。

「人はなぜ学ぶのでしょうか」と考えると、

- ①学ぶこと自体が楽しいから（好奇心を満たしてくれる）
 - ②将来、自分をより豊かな人生に導いてくれるから（向上心。誰しも）
 - ③突然の出来事に備えるため先人の教えに耳を傾けることで、未来にむかっていけるから（安心・安定を求める）
 - ④広く人間関係を築く上で、知識が重要と考えるから
- 等に集約することができる。

区が事業として行なうためには、僭越ながら

- ①長期ビジョン（継続性が行政だから可能である）
- ②人のニーズ把握（対象に対してデータを持つことが可能）
- ③実施結果に対する検証と改善
- ④情報発信・広報活動（行政だから公正にしがち。多メディアにて可能）

⑤区民の参画を促すこと

等が行政しか出来ない得意分野と思う。

区には、生涯学習の心臓の役割を担い、市民は生涯学習における血液として、常に新しく再生しながら活動する役割を担うこととなる。その血液は、循環し、新陳代謝を繰り返しながら進化・発展することと考える。

以上のような行政の役割と市民の役割（ポジション）を明確にしながらも柔軟に対処することが重要と思います。外形的には市民全体の運営参加型が、いずれは、自然派生的にネットワーク構築や街づくりに進化発展することを切に願っております。

「区民のもつ豊富な知識・技術・経験の活用について」

石田 勝彦（公募委員）

標題につき次ページの図と、本文による報告をします。

1. 基本的な考え方

区民の中には特定の分野で豊富な知識・技術・経験を持ちながら、退職後、その力を活かす場のない人が多い。これを有効化するための具体策を協議し、実行に移す組織が必要である。

2. 具体的な組織づくり

(1) まず区民に対し「自分はこれこれの事ができる、それを行動に移したい」と考える人を公募し、適格である人々を選び参画して貰う。

(2) 他に、地域文化創造館、図書館、区へ登録の人材バンクの如く実際に活動をしているグループから参加して貰う事も大事。

(3) 行政側については、側面から種々の支援を得たい。

3. 組織結成後

(1) 参加者の活動をしたい分野は多岐にわたると思われ、それを分科会として編成する。

(2) 例えば

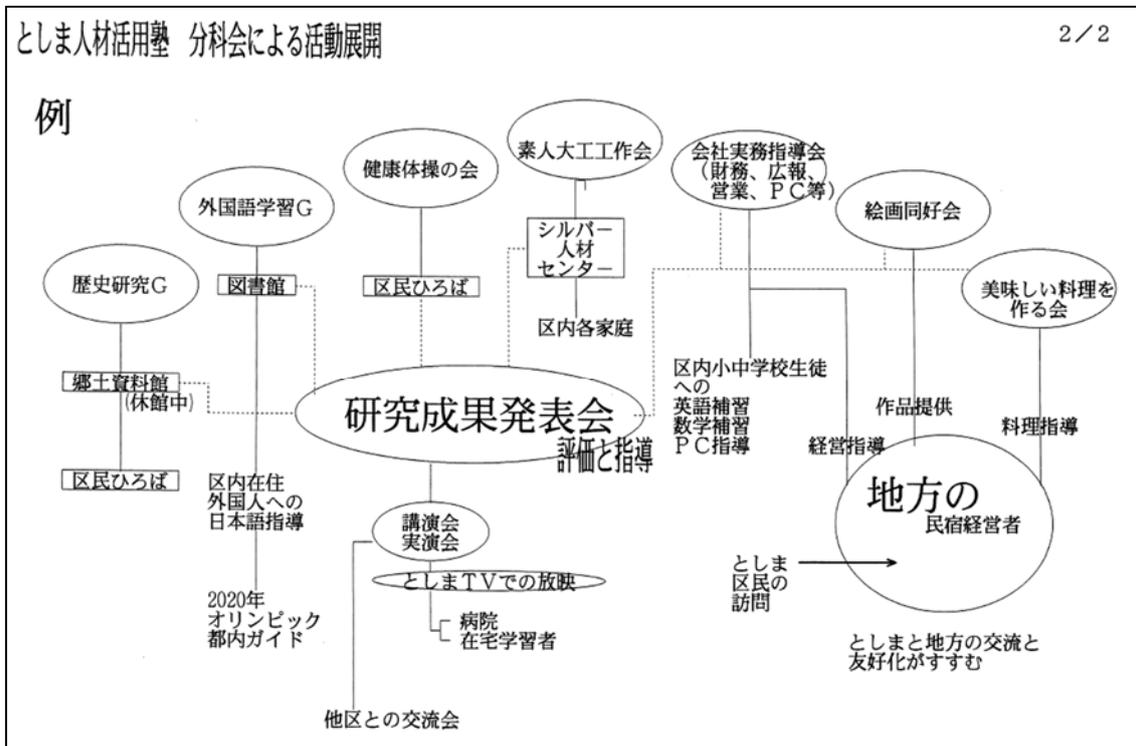
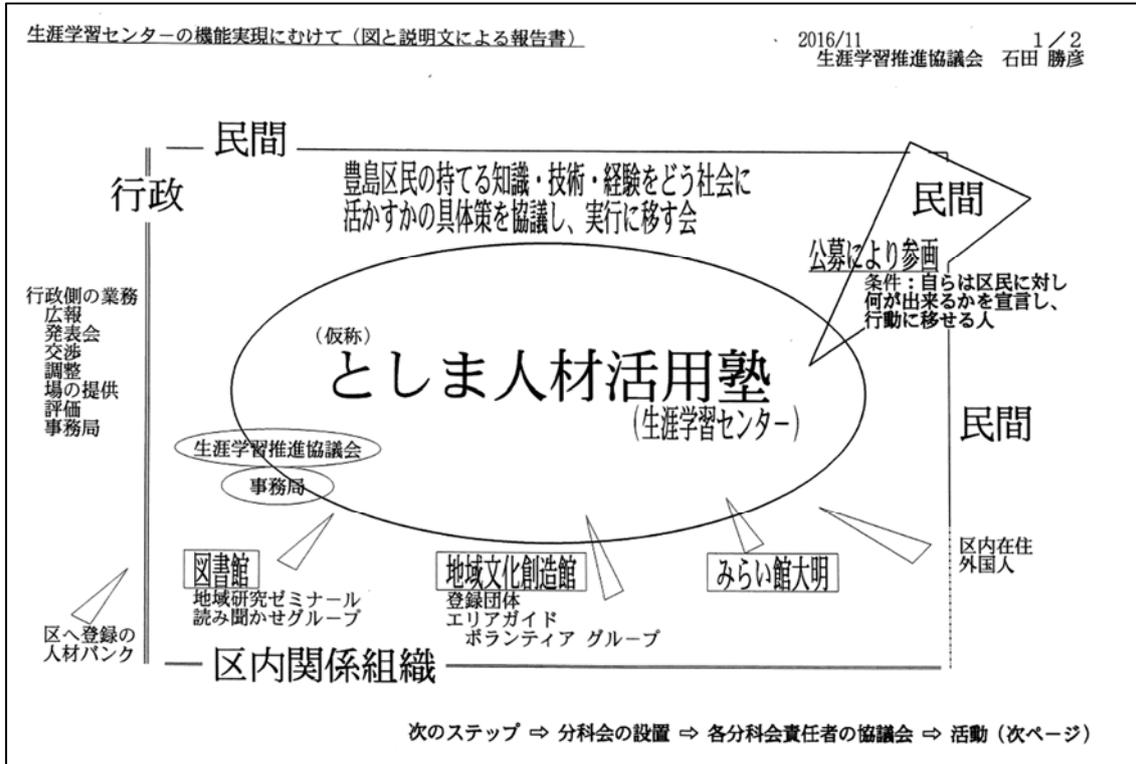
A 中国語学習グループは、区内在住の中国人へ日本語教育の補習塾を開く、或は歴史を教え、区に対し郷土愛を持つような活動が好ましい。

B また、絵画同好会や陶器を楽しむ会は、各自の自信作を地方の民宿経営者へ室内美術品用、或は実用の器として寄贈する事で地域交流が進む。

(3) 分科会は定期的に集合し、研究成果発表会を持つ事が肝要。その活動に対して評価が大事である。他からの評価で反省があり、自信や責任感を持てる。

(4) 以後、成果をあげた人、グループは発表会や実演会により区民へその内

容を発表してゆく事が良い。



「団体間のネットワーク構築をめざして」

野口 かおる（公募委員）

生涯学習センターとして、まずは市民団体間のネットワーク構築を行い、人材育成と団体間のコーディネート機能を高め、徐々にプラットフォーム的な場の提供につなげていけたらと考えます。

例えば、生涯学習センターで団体間の交流の場を作ってみてはどうでしょうか。多様な団体がありますが、共通活動の団体間の交流会なら集まりやすいのではないのでしょうか。

各地域で活動している市民団体には様々な課題があると思います。それらの課題は外に発信する機会が少なく把握は難しいですが、共通する課題があると思われま。交流の場の定期的な開催で団体間の連携が生まれ、課題解決の糸口も見つかるかもしれません。

開催当初の参加の促しは地域創造館や区民ひろば等の施設職員のご協力が不可欠ですが、活動や地域特有の課題やニーズ等の集約が期待でき、求められる人材育成を把握することができると考えられます。そこから人材育成プログラムを構築し、ニーズが高まったときにコーディネーター人材育成の講座を開催することで、生涯学習センターのコーディネート機能につなげていけるのではないのでしょうか。

また、それらの場に豊島区内の大学の社会・教育・福祉等の学生に参画していただければ、区の職員の方と協同し情報発信などの整備も可能になります。

このように、今までの生涯学習の団体に新たな人に入いただくことで活性化につながり、新たな展開も期待できると考えます。

6. おわりに

「人づくり」ということがよく言われますが、行政などが人をつくるのではありません。子どもから大人まで、自らが自らをつくっているとわれわれは考えます。人材育成の本質は、「人づくり」ではなく「われづくり」にあるといえます。同時に、区民一人一人の自己の充実のための学びは、人によって支えられ、地域での区民同士の学びあいと支えあいは、この意見書がめざす生涯学習センターをはじめとする社会的支援機能によって支えられると考えます。

本意見書が要望する生涯学習センターとは、区の全域に広がる多様な学習や地域づくりのための各センターの拠点となる専門的センターです。その「センター・オブ・センター」機能を、区民との協働によって発揮することによって、「つどう・つながる・つなげる・つくりだす」という理想像が実現できるものと考えます。そして、区民一人一人も、そのような環境と活動のなかでこそ、「われづくり」を味わい、さらには「地域づくり」のなかで自己を発揮し、社会に発信できるのではないのでしょうか。

そこにこそ、自己の充実とともに、人々と協働し、相手に喜んでもらって役割を果たすことによる達成感と自信が生ずるものと考えます。地域づくりもまた、このような区民一人一人の自己に適した分野での自発的活動です。文化と同様、押し付けでは地域づくり活動は育たないのです。精神論の押し付けなどよりも、個人がそれぞれになりたい自己像に近づくために必要な能力を、具体的にリストアップし、構造化して示すことこそ求められているといえるでしょう。そのことが、結局は、個人完結型の生き方から社会開放型の見方・考え方への転換のための一番の近道になると考えます。そこで個人が選択した「必要能力」こそ、個人の学習目標であり、地域づくりのための必要能力として社会で共有される達成目標になるのだと考えます。

生涯学習は、区民の暮らしや仕事に結びついて、さまざまな内容とかたちを伴って自由に展開されています。これらは、生涯学習センターでのワンストップサービスや他の連携・交流活動のなかで、生涯学習や地域づくりに関わる現代的な事例や知見として蓄積されます。これが生涯学習センターでの調査研究活動に生かされ、研究と区民参画の水準を高めていきます。この循環は、協働型の政策提言とともに、もう一つの大きな意義を社会にもたらすことが期待されます。それは区民の暮らしや仕事の現場の観点から、「生涯教育学」や「地域づくり学」の構築に貢献するということです。

研究の細分化が進行して、区民の暮らしや仕事と学問とが遊離しがちな現在、生涯学習センターで展開されるプログラム開発や調査研究事業の実践は、区民の目線からの新しい視野を提供することができると考えます。それは、区民の暮らしに基づいた「われづくり」「地域づくり」のための提言であり、区民参画

の成果による根拠や検証結果を伴った提言としても高い価値を持つものになると考えます。社会に開かれた目線で見えた場合、そのテーマは、コミュニティ形成、産業振興、企業等の社会貢献、青少年育成、子育て支援、福祉、環境、共生、持続可能な発展のための学習など、限りなく広がっています。

このように考えたとき、これらのプラットフォームとしての生涯学習センターにおいては、区民の暮らしや仕事に結びつき、その学びや活動を支援し、産業、大学などとの連携のほか、効果的な行政施策の展開に結び付けていく専門的職員の役割が大変重要であるといえます。社会教育主事のコーディネーターとしての役割発揮などを含め、スタッフの必要能力を明らかにし、その柔軟で効果的な配置により、上に述べたセンター・オブ・センター機能が十分に発揮できるように整備されることを望みます。

このような個の充実とそれを支える社会システムによって、区民の参画と協働は、より広く深く推進することができるものと考えます。